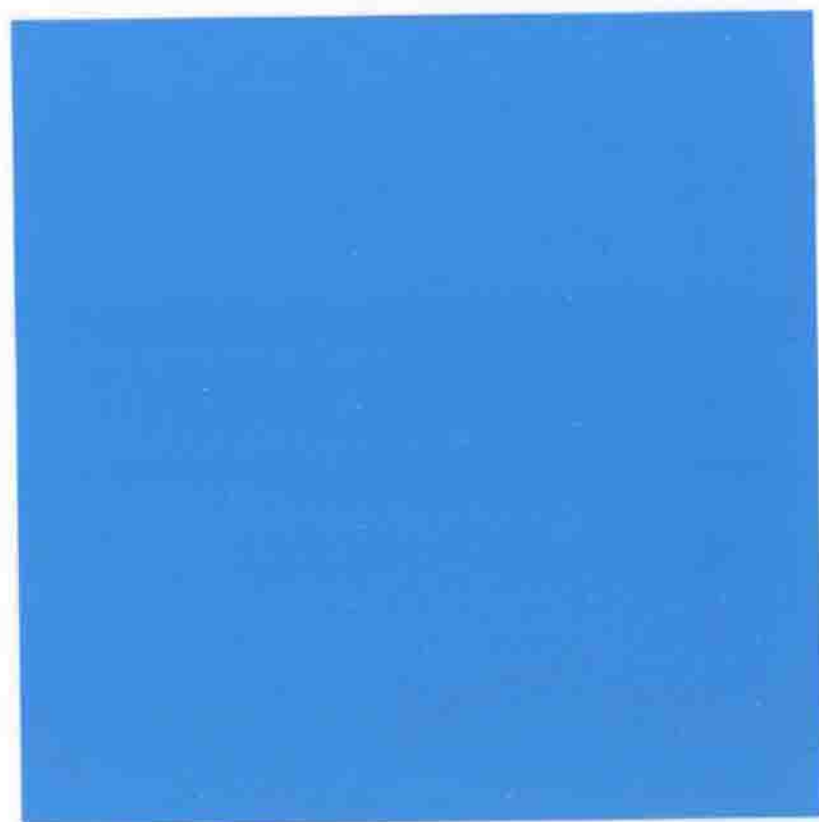


僕がメディアで伝えたいこと

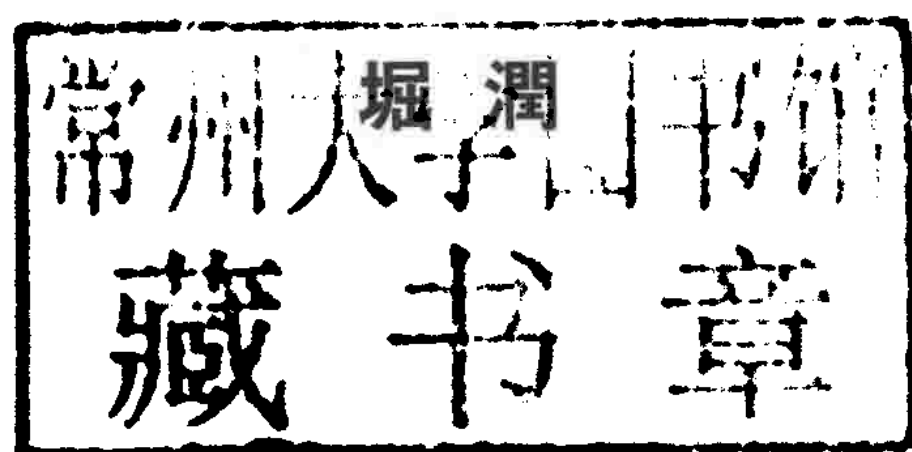
堀 潤



講談社現代新書

2223

僕がメディアで伝えたいこと



講談社現代新書

2223

講談社現代新書 2223

僕がメディアで伝えたいこと

二〇一三年九月二〇日第一刷発行

著者 堀潤 ほり じゅん ©Jun Hori 2013

発行者 鈴木哲

発行所 株式会社講談社

電話 東京都文京区音羽二丁目二二-二 郵便番号 112-8001
出版部 〇三-五三九五-三五二一

販売部 〇三-五三九五-五八一七

業務部 〇三-五三九五-三六一五

装幀者 中島英樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。〔R〕（日本複製権センター委託出版物）

複写を希望される場合は、日本複製権センター（〇三-三四〇一-二三八二）にご連絡ください。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り扱いいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに

3

第一章 NHKで学んだこと

12

泊まり込みの新人研修／実は落ちまくっていた民放の入社試験／なぜ「NHK」だったのか／「アナウンサー声」の身につけ方／被害に遭った人々の声に触れる／森本毅郎さんや大越健介さんと同じ初任地／ニュース原稿を読む難しさ／アナウンサーがいちばん怖れること／正しい日本語を使わなければならない／公共放送の果たすべき役割／五分のリポートに三日かけることも／NHKの一アナウンサーである前に／「岡山人への道」／現場に行かなきゃわからない／「NHKさんに取り上げてもらったのは誇りなんよ」／全国放送に乗せることの難しさ／虐待問題を番組で扱った理由／NHKの地方局ならではの仕事／「嘘つき」と怒鳴られて／視聴者への裏切りは謝罪すべき／NHKにとっての伝統や革新とは／いいように取り繕う放送はしたくない／急転直下の異動

第二章

僕がカメラに背を向けた理由

「チャラチャラしたヤツは現場に行かせない」／「給料泥棒」と呼ばれて／「早く成果を出そうとあせるな」／笑い顔でリポートするな／現場感を伝えるための工夫／「ワンカメ中継」の狙い／『ニュース7』との違い／ストーリーに合ったコメントを欲しがる番組作り／ニュース番組の限界／「ローカル放送じゃないんだ」／「報道の力」／「特ダネ」を狙い続けて／緊急報道住宅で常に臨戦態勢／それは瓦礫でもゴミ袋でもない！／あえてカメラに背を向けた理由／「早起きは三文の得」作戦／物事を一面的には捉えない／「人々に寄り添う」報道への疑問／見逃さなかった一瞬

第三章

果たせなかったメディアの責任

大企業目線だった『Bizスポ』／「黙って原稿を読めばいい」「打ち合わせにないことはやるな」／ニュース原稿を読むだけのキャスターにはなりたくなかった／堀尾正明さんのつぶやき／自腹取材で見た「タイの現実」／「攻める」農家取材／「ジャージを着た銀行マン」に驚愕／「サイド業務」を終えたあとで／僕がツイッターを始め

たわけ／閉鎖的な言論空間／使用禁止用語／「東京電力」福島第一原発／メディアの責任／真っ赤な嘘／「原発の話はもういいよ」／人間関係が一気に広がった『ニッポンのジレンマ』／海外派遣制度を利用してアメリカへ／「君は国家を転覆させようとしているのか」／事実を伝え切れていないニュース番組／厚かった「大きな官僚組織」の壁／ツイッター閉鎖／「8bit News」と「パブリック・アクセス」

第四章 僕がメディアで伝えたいこと

公平中立を保とうとするアメリカメディア／キーワードは「オープン」／情報を共有することの重要性／ドキュメンタリー映画を作った理由／ロスで見た「福島の五〇年後」／『きょうの料理』と『女神ビジュアル』／上映会中止命令／再び二二階の大会議室へ／三〇分の退職劇／「声なき声」をメディアで伝えていきたい

おわりに

僕がメディアで伝えたいこと

堀 潤

講談社現代新書

2223

はじめに

二〇一三年四月一日、僕は一二年間勤めたNHKを去った。あらためてアナウンス室の同僚や視聴者のみなさんにあいさつをすることもなく、ただ静かに、ひっそりと。

退職後、さまざまなメディアのインタビューで「NHKに留まったままでは、僕が目指す次世代メディアを創れないから」と辞めた理由を説明した。しかし今、あらためて「なぜ退職したのだろう」と自問すると、僕はこんな答えにたどり着く。逆説的ではあるけれど、「NHKが大好きだったから」と。おこがましい言い方かもしれないが、NHKを去った後、僕が新しいジャーナリズムを実践してみることで、大好きなNHKがもっと視聴者のみなさんにとって使いやすいメディアに変化するのではないか——どこかでそんな期待があったのだ。そして今も、僕はそんな期待を抱いている。

何かを生み出すには何かを壊さなければならぬとよく言われる。「創造的な破壊」と呼ばれるものだが、それと同様に、「創造的な退職」があってもいいのでは——僕はそう思った。

次世代メディアを創造するため、僕はNHKを辞し、前へと足を踏み出した。

退職してからの日々は、あつという間だった。ブロマガを立ち上げニコニコ動画に出たり、いろいろな分野で活躍されている有識者のみなさんと対談をしたり、民放のバラエティ番組に初出演したりと、NHK時代にはできなかった数々の経験をした。自民党が圧勝した先の参院選では、テレビ神奈川から声をかけていたたく形で選挙速報番組の司会を任された。

そのかたわら、時間を見つけては福島を訪ねている。今でも僕を突き動かしているのは、福島の人々の「声なき声」だ。ご存じのように、東京電力福島第一原子力発電所の事故の後、僕はツイッターでNHKのニュース番組ではなかなか伝えられなかった「現場の事実」を伝えた。ツイッター上には、むやみに切り捨てるべきではない情報や、メディアには取り上げられていない「声なき声」がたくさんあったからだ。それは「失われた「公」の言葉」でもあった。しかしそれらをツイッターでつぶやいた結果、NHK内にハレーションを生んでしまった。

通常、ニュース番組は最終的に完成された一つの事実しか伝えない。しかし、価値観が多様化した今、そして、ソーシャルメディアという多数の人々の声をリアルタイムに

伝えることができるメディアが発達した今、一人でも多くの人々の声を伝える必要があるのではないか——僕はそう考えている。福島には今も“声なき声”がたくさんある。そうした声を伝えていくのは僕のライフワークであり、NHK時代に報道を通して多くの事実を伝え切ることができなかった僕の果たすべき責任だと思っている。

もとはといえば、人々の声に真摯^{しんし}に耳を傾けることの大切さを教えてくれたのは、NHKだった。新人研修の一環として、松本サリン事件の被害者や差別を受けているハンセン病患者の話を直接聞いた時のことは、今でも鮮明に思い出される。

NHKの諸先輩や撮影スタッフの方々からも多くのことを学ばせていただいた。カメラには背を向け、目の前にあることをひたすら伝え続けるという報道姿勢を教えてください。柳澤秀夫さんは、僕にとってジャーナリストの鑑だ。数々の局面でいつも僕のことを守り、励ましてくれた先輩方も大勢いた。

しかし何より、僕に多くのことを学ばせてくれ、僕を人間的に鍛えてくれたのは報道現場だ。

本書では、数々の報道現場で見て、聞いて、そして考えたことをできる限りお伝えし

たいと考えている。そこにはテレビでは伝え切れない、現場の雰囲気や空気感といったものがあるからだ。現場で出会った人々からも多くを学ばせていただいた。僕が身分証明書だけでなく、ヘルメットやメガジャーを持って取材で訪れた災害の現場には被災者がいて、事件の現場には被害者と加害者がいた。

「私の家を『瓦礫^{がれき}』と簡単に言わないで」

メディアが安易に使う「瓦礫」の中には、日々の暮らしや人生が詰まっていることを被災した方から教えていただいた。

また、事件の加害者には犯罪へと追い込まれてしまった理由があった。

そして、彼らの姿を目の当たりにして思った。僕も、そしてテレビの前の視聴者のみなさんも、いつ被害者、あるいは加害者になってもおかしくないのだと。それほど現実是不条理に満ち溢れているし、人はみな踏み越えてはならないか細い線の上につま先立ちで立っている。それを踏み越えてしまうには必ず理由がある。かねて性善説を信じている僕はそう思う。

僕の中に性善説を見出してくれたのは、NHKのある理事だった。入局試験の最終面

接。僕は理事たちを前に「NHKを、もっと市民とつながれるような『正直な公共放送』に変えていきたい」と主張した。すると、理事の一人がこう言った。「君が主張したところで、変わるような組織だと思っっているのか。性善説な若者だな、君は」と。

しかし僕は、たとえ「青臭い」と言われようとも、今でもその言葉を貫き通したいと思っっている。たとえそれがどんなに大組織であつたり、国という抗^{あらが}い難い巨大システムであつたとしても、性善説を信じ、日本を、社会をいい方向へ変えていきたいという志なくして、どうして前に進んで行くことができるだろう？ 「何をしたところで、どうせ社会のシステムは変えられっこない」とため息をこぼす大人であるより、青臭く性善説を吐き続ける人間であり続けたい。

しかし、僕一人で変えることはできない。「コレクティブ・インテリジェンス」という言葉がある。集合知。「三人寄れば文殊の知恵」といった意味に近いかもしれない。ソーシャルメディアが発達した今、たったの三人ではなく、たくさんの人々の知恵を結集して問題に対処し、解決することが可能になった。みなさんの知恵や経験や専門知識を寄せ合いながら問題を解決し、社会をよりよくしていくことこそ、人々の声を反映することができる民主主義の正しい形ではないだろうか。

僕は次世代メディアを“声なき声”を伝える場にするとともに、さまざまな知が結集される場にしたいと考えている。そこはまた、情報が包み隠されることなく、開示された場でもある。一人でも多くの方々が、次世代メディアの中でニュースの発信者となって主張を伝えることができれば、これまで抱くことができなかった、社会に参加しているという実感を得ることができるようではないか。

僕の踏み出した小さな一歩が、日本を変える大きな一歩になることを僕は願っています。

みなさん、力を貸してください。発信を通して僕と一緒に、愛する日本を開かれた国へと変えていきましょう！

目次

はじめに

3

第一章 NHKで学んだこと

12

泊まり込みの新人研修／実は落ちまくっていた民放の入社試験／なぜ「NHK」だったのか／「アナウンサー声」の身につけ方／被害に遭った人々の声に触れる／森本毅郎さんや大越健介さんと同じ初任地／ニュース原稿を読む難しさ／アナウンサーがいちばん怖れること／正しい日本語を使わなければならない／公共放送の果たすべき役割／五分のリポートに三日かけることも／NHKの一アナウンサーである前に／「岡山人への道」／現場に行かなきゃわからない／「NHKさんに取り上げてもらったのは誇りなんよ」／全国放送に乗せることの難しさ／虐待問題を番組で扱った理由／NHKの地方局ならではの仕事／「嘘つき」と怒鳴られて／視聴者への裏切りは謝罪すべき／NHKにとっての伝統や革新とは／いいように取り繕う放送はしたくない／急転直下の異動

第二章 僕がカメラに背を向けた理由

「チャラチャラしたヤツは現場に行かせない」／「給料泥棒」と呼ばれて／「早く成果を出そうとあせるな」／笑い顔でリポートするな／現場感を伝えるための工夫／「ワンカメ中継」の狙い／『ニュース7』との違い／ストーリーに合ったコメントを欲しがる番組作り／ニュース番組の限界／「ローカル放送じゃないんだ」／「報道の力」／「特ダネ」を狙い続けて／緊急報道住宅で常に臨戦態勢／それは瓦礫でもゴミ袋でもない！／あえてカメラに背を向けた理由／「早起きは三文の得」作戦／物事を一面的には捉えない／「人々に寄り添う」報道への疑問／見逃さなかった一瞬

第三章 果たせなかったメディアの責任

大企業目線だった『Bizスポ』／「黙って原稿を読めばいい」「打ち合わせにないことはやるな」／ニュース原稿を読むだけのキャスターにはなりたくなかった／堀尾正明さんのつぶやき／自腹取材で見た「タイの現実」／「攻める」農家取材／「ジャージを着た銀行マン」に驚愕／「サイド業務」を終えたあとで／僕がツイッターを始め

たわけ／閉鎖的な言論空間／使用禁止用語／「東京電力」福島第一原発／メディアの責任／真っ赤な嘘／「原発の話はもういいよ」／人間関係が一気に広がった『ニッポンのジレンマ』／海外派遣制度を利用してアメリカへ／「君は国家を転覆させようとしているのか」／事実を伝え切れていないニュース番組／厚かった「大きな官僚組織」の壁／ツイッター閉鎖／「8bit News」と「パブリック・アクセス」

第四章 僕がメディアで伝えたいこと

公平中立を保とうとするアメリカメディア／キーワードは「オープン」／情報を共有することの重要性／ドキュメンタリー映画を作った理由／ロスで見た「福島の五〇年後」／『きょうの料理』と『女神ビジュアル』／上映会中止命令／再び二二階の大会議室へ／三〇分の退職劇／“声なき声”をメディアで伝えていきたい

おわりに